期待される先端基礎研究センター

横溝　英明　理事
Hideaki Yokomizo

平成４年の科学技術会議で、今後わが国で進める研究として、基本的な原理・現象に立ち返るような基礎研究の重視が謳われた。一方当時、わが国の原子力研究開発は、研究開発を開始して40年近くが経過し、もはや諸外国にその手本を必ずしも見出せないレベルにまで成長したため、新たな展開を自ら行うには、本来の基礎研究の一層の強化を図る必要が生じていた。先端基礎研究センターの設立に当たり学識経験者を含む委員会によって、(1) 原子力研究開発の課題に対して原理、現象の根源に立ち返り、これを解明する研究に力点を置く、(2) 広い視野のもとに、原子力の発展と同時に他の分野の開発を先導する研究等の発展を図る必要があると指摘された。その実施に当たっては、基礎研究を強力に推進できる組織とすること、広く内外から研究テーマを募り事前評価を行うこと、外部からもリーダー、研究者を受け入れること、研究者の創造性・自主性を重んじた運営管理を行うことなどが提言された。

平成５年４月に設立された先端基礎研究センターでは、所内外から募った研究テーマを独創性、将来の発展性等の評価に基づき選定するとともに、国内外からリーダーや研究者を積極的に受け入れ、テーマ毎に原則５年の期限を定めて自主性、機動性、開放性を重んじた組織運営を行ってきた。設立以来15年が経過し、センター長は３代目に交代しているが、基礎研究の重要性は当時といささかも変らず、センター設立の理念もしっかりと受け継がれてきた。３代目の籏野嘉彦センター長は、センター設立の理念を受けて、日常の研究活動の指針として４つのセンタービジョンを定めた。(1) 国際的レベルの真の先端基礎研究。(2) 機構の特徴（物的・人的資源）を生かした「原子力」に関する先端基礎研究。(3) 萌芽的段階の研究を一人歩きできるまでに育てる先端基礎研究。(4)科学技術基本計画との照合である。このセンタービジョンは、センター、および研究者の研究活動規範になると同時に、研究テーマおよび研究成果の自己点検評価基準にもなる。

昨年のノーベル平和賞に象徴されるまったなしの地球環境問題への対応、オリンピック特需に沸く中国など発展途上国におけるエネルギー需要の急増、追い討ちをかけた石油価格の高騰を踏まえて、原子力発電が見直され、その需要が急速に高まってきている。安全で、信頼性が高く、建設費および維持費が小さく、永く利用していける原子力システムを開発することは、まさにどこにも手本がない最先端の研究開発となる。人類の持続可能な発展のために原子力研究開発で貢献することが、原子力機構に課せられている大きなテーマである。それを実現していく上で重要な素地には、先端基礎研究センターが生み出す基本的な原理、現象の解明に負うところが大きい。先端基礎研究センターが、センタービジョンのもと社会のニーズを反映して自ら変貌しつつ、最先端の成果を出して原子力研究開発を先導していくときに、結果として科学、技術の大きな進展がもたらされ、新たな原子力システムが実現されよう。先端基礎研究センターへの期待が大である。